

長崎

「半焼けの遺体」「繰り返し続いた植皮」 被爆3世代、つどいで語る



長崎教区は8月7日、「平和のつどい」第11回全戦没者追悼法要」を長崎県諫早市の長崎教堂で開いた。

つどいは、原爆投下当時の状況を話せる被爆者が年々減少して記憶の風化が進む中、核兵器をはじめとする戦争の凄惨さと愚かさを次代へ伝えようと毎年開いている。8日は、「戦後70年―私が託されたもの」をテーマにシンポジウムを催した。

長崎在住の被爆1世の山脇佳朗さん(80)、2世の吉田尚司さん(52)、3世の小柳雅樹さん(17)がパネリストを務め、130人が参加した(写真)。

被爆1世の山脇さんは「爆心地から500メートルの焼け落ちた工場ですくすく育った父の遺体

を見つけた。近くにいた人から『持ちかえるのは無理だから、埋めるか焼くか』を問われ、火葬した。翌日、骨を拾いに行ったら、遺体

は半焼けの状態で、火爆、植皮手術を繰り返し、軍縮会議本ばして頭が骨をつついた瞬間、白濁した脳みそがドロリと流れ出て、恐ろしくなり骨を全部拾いきれず逃げてしまった。父を見捨ててしまったという思いが今でも心に突き刺さっている」と70年前に父を失った体験を語り、「原爆は生き地獄。二度と使ってはならない」と訴えた。

被爆2世の吉田さんの父・勝二さんは、13歳の時に爆心地から約850メートルの路上で被

爆、植皮手術を繰り返すなど原爆の後遺障害に苦しみながら、語り部として非核を訴え続けた。吉田さんは、勝二さんを題材とした絵本の朗読を行い、「父は毎回講話の最後に『平和の原点は人の痛みがわかること』と訴えていた。私たちは国連の人たちが訪れてくることができなく、日常生活から平和を意識することによって平和が実現していく」と受け継いだ思いを語った。

を訪問し、軍縮会議本会議で発言した経緯などを紹介。「祖父母のような被爆者を二度と出してはならない。平和への思いを訴え続けることで人がつながっていく。軍縮会議で発言の機会をいただきたいこと、広島、長崎に国連の人たちが訪れてくることができた。平和への願いを次世代に継承していくのが被爆3世としての私の使命。同世代と力をあわせ核廃絶への思いを世界に届けていきたい」と核廃絶活動への思いを熱弁した。

第17代高校生平和大使を務めた小柳さんは、昨年スイス・ジュネーブの国連欧州本部